

# 幼児の造形における道具を使う技術と表現について

Young Children's skills of using tools in art-making and their expressions

大屋 理香

Rika Oya

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード : 造形, 表現, 道具

Key words : Art-Making, Expression, Tools

## 1. 研究目的

本研究は、幼児の造形活動において道具の技術習得によって表現がどのように広がっていくかということを実感してき、これを明らかにすることが目的である。

これまで幼稚園教員として勤務してきた経験の中で「ものを製作する造形活動」というものが園での生活において子どもの成長と深く結びついていることを実感してきた。幼児の生活の中で砂遊びや木の葉と枝を使ったままごとなど、造形と結びついた自発的活動を多く見出すことができる。

造形活動では年少から年中、年長へと成長を見ていると、さまざまな造形活動を行うことで集中力や目的意欲が強化され自己表現がより豊かになっている。

造形活動を通して自己表現の仕方がより豊かになることで、言葉では表現できず精神的に不安定であった子どもが落ちつくようになる場面や登園を嫌がっていた子が自分の作品を友達に認められるようになり、自信が付き園生活を楽しむ場面など親子関係や園生活などの良い方向になる事例を何度も見てきた。

造形活動を通して自己表現は道具の使い方でも変化することに気づいた。たとえば、ハサミの場合、真っ直ぐ切ることから、細長く切れるようになると、細麺・太麺や歯ブラシのブラシ部分のような表現も可能になる。そこで、造形技術の習得によって表現がどのように広がっていくかということを実感してき、これをフィールドワークを通して明らかにしていきたい。

## 2. 研究実施内容

はじめに、幼児の造形活動に関するさまざまな先行研究を検討した。幼児の造形活動に関する研

究において、絵画的表現に関するものは比較的多いが、立体造形に関するものはあまりなく、その中でも道具の使い方といった造形技術の習得に焦点をあてているものはきわめて限られていることがわかった。しかし、佐川早季子の研究方法<sup>1)</sup>から、研究テーマは異なっているものの、幼児の造形活動の観察記録のとり方やビデオ撮影の仕方など、調査方法に関して多くのことを学ぶことができた。

5月には、「保育学会」に参加したが、保育学の分野では幼児の造形と技術の問題をどのように捉えているのかということを知るための貴重な機会となった。保育学においても、絵画についての研究に比べると立体造形の技術習得に関するものは少なく、その原因としては、幼児にとっての造形技術の重要性があまり理解されていないということがひとつ考えられる。

6月に参加した「日本ホリスティック教育・ケア学会研究」からは、幼児の造形活動を考える上でも、心と身体とのつながりを意識したホリスティックなアプローチが有効であるということを実感することができた。

5月より、予備調査の意味も含めて、いくつかの幼稚園や保育園を訪れたが、本研究のテーマに即して、継続的な調査を実施できる場を探すことは容易ではなかった。最終的には、本研究の目的を十分に理解してもらえた埼玉県浦和にあるA保育園において、9月よりフィールドワークを始めることになった。

まず、予備調査として、この園の子どもたちが、現段階では、どのくらいハサミや糊を使いこなすことができるかということを実感してき、これを調査した。ハサミと糊を用意し、年中児20名に対して造形活動を促し

たが、四角い紙に対してハサミを自由に動かし鳥やハートを切り抜き作製することができる子どももいるが、ハサミの開閉がうまくできず紙を切り落とせない子どももいるといったように、道具の使い方には個人差が著しいことがわかった。

11月には、幼児の生活の中での造形活動を積極的に行っているイタリアの「レッジョエミリア保育施設視察」に参加することができた。そこでは、子どもたちの自由な表現を可能にする環境が保証されていて、何事にも意欲的に取り組む姿、どんな相手の表現も認め受け入れる姿が見られた。子どもたちの作った作品を見ると、造形技術という点では、個人差が著しく、造形技術を習得している子どもの作品としていない子どもの作品とでは大きく表現の仕方が変わっていた。

レッジョミリアの保育者に、造形技術の習得に関しての質問をしたところ、特に指導しているわけではなく、子どもたちの自主性に任せているという答えであった。より自由な表現を可能にするためにこそ、技術の習得というものが重要であると再認識した。

そこで、A 保育園での調査は、「素材と触れ合う中で子どもは自主的にハサミ、糊を使うことで技法を習得していくのかどうか」その過程を基本に調査を進めることにした。

まず、保育室内に造形活動のできるコーナーを設定しさまざまな種類の造形素材を用意した。このコーナーには、遊びの時間に自由に出入りすることができる。造形活動の様子は、ひとりひとりの素材と道具の使い方に関心をあててノートに記録するとともに、必要な場面は写真に撮り、固定した定位置からのビデオ撮影も並行して行う。

子どもたちが素材の特徴をつかみやすくするために、絵柄のあるものは避け、無地に近いものや柄が主張すぎない素材を選んだ。造形活動に発展させるときに、道具としてのハサミの使い方に着目するため、容易に切ることでできる素材と、切りたくても切りにくい素材の両方を揃えた。

その結果、ジュース、ケーキなどに見立て、作りやすい紙コップ、紙皿、ストローの素材を使った作品が多かった。また、完成時の既に明確なイ

メージがあり、それを再現しようとする子ども、素材と自由に触れ合うことでの過程の中でイメージが生まれ、それを表現しようとする子ども、とりあえず素材と触れ合うことに専念している子どもがいた。

また、自分のイメージを自由に表現したいが、技術の習得が追いつかない状況のときに、道具の使い方に関して試行錯誤をしている子どもがいることが分かった。現在ビデオ記録を細かく文章化し、子どもの造形技術の習熟度を把握したうえで造形技術の習得プロセスとそれが自由な表現にどのように広がりにつながるのかを分析中である。

### 3. まとめと今後の課題

A 保育園でのフィールドワークにおいて、これまでは、ハサミの使い方といった造形技術を指導するということは意図的に避けてきたが、次の段階では、基礎的なハサミ、糊の技術を伝えられ、ひとり、ひとりの自由な表現が可能な環境を設定したいと考えている。また、引き続きコーナーを設定し、さまざまな種類の造形素材を用意し触れ合えるようにし、表現の変化を追っていく予定である。

子どもの生活の中で素材に触れ合い製作することは、見たもの感じたことを表現しやすく、そこには想いが多く詰まっているからこそ意欲的に何かを作りたい、表現したいとなる。そうした造形意欲の高まりの中で、子どもが技術を自然と身につけるにはどのような環境設定が必要なのだろうか。そして、表現がどのように広がるのかを明らかにするのが今後の課題である。

#### 注

1)佐川早季子「幼児の共同的造形遊びにおけるモチーフの生成過程の分析—幼児の注視方向に着目して—」『保育学研究』第 51 巻, 第 2 号, 2013 年, p163-175

佐川早季子「幼児同士の仲間関係形成に伴う造形表現過程の変化—4 歳児の製作場面におけるモノを「みせる」行為と製作過程に着目して—」『保育学研究』第 55 巻, 第 1 号, 2017 年, p31-42